猫かわら版

今からおよそ一八〇年前の江戸時代。戯作者の「山東京山」が物語を書き、浮世絵師の「歌川国芳」が絵を描いた本、題して『朧月猫の草紙』。

その草紙によると「人は鳥獣を養い、心を慰めるが、鳥は鳴き声を楽しみ、犬は盗人の用心になる程度。それに引き替え、猫ほど役に立つものはない。燃えるような緋色の縮緬の首輪をした猫を綺麗な娘が抱く姿などは、まるで牡丹に蝶がとまったような美しさである。」と語られるほど。

ここからは『朧月猫の草紙』の物語のはじまり、ところは鰹節問屋「又たび屋」粉右衛門の家。家中が猫好きなうえ、鼠の好物を商うので、猫を三匹飼っていた。そのうちの一匹のおこまのお腹が大きくなったので、みかん籠を用意しておいた。下女の「おこまが産みました」との声に、おかみさん、「おやおや、道理でさっき、おつな声で鳴くと思ったよ」。生まれた子猫は五匹。駕籠かにら一匹出しているのは、九歳になる息子である。手習いのお師匠さんがオス猫を欲しがっていたからと、「こいつぁ、牡だ。持っていこう」

猫は、百匁(0.37 kg)にならないと飼えないものだから「まだ駄目よ」と言う母だが、息子は大はしゃぎ。

【解説】産まれたての子猫は 0.1 kg。百匁(0.37 kg)になるのは生後三週齢。この頃には前歯が生え出し、よたよた動くものの、母猫から離すにはまだ早い。江戸時代では、人に懐くために早かったのかもしれない。

現在では、生後八週齢を経過しない犬猫の販売は、改正動物愛護管理法で禁止されている。つまり三百匁(約1.0 kg)、それは猫の社会性を身につけるためのものなのです。